

おかやま子ども支援ネットワーク事業 年間事業報告【備前圏域】

担当法人：一般社団法人子どもソーシャルワークセンターつばさ

(※記載内容は、令和5年3月31日時点のものです)

1 担当法人の紹介

(1) 設立経緯・活動目的

一般社団法人子どもソーシャルワークセンターつばさ（以下「つばさ」）は、2016年に設立されました。

現在は、岡山県倉敷市内を中心に子ども達が安心して育つことのできる地域づくりを目的に掲げ活動しています。子どもの居場所づくり事業などを通して、個別に困りごとや生活状況などを聞き取り、生活支援などの適切な支援を実施、または公的機関や民間支援団体のもつ既存のサービスへつなぎ、地域の中で子育て家庭が孤立しないように支援を行うことを目的としています。

(2) 活動内容

【夜の子どもの居場所づくり事業（通称：倉敷トワイライトホーム）】

夕方から夜にかけて子どもが家でひとりぼっちで過ごしている家庭や、経済的に困窮している家庭、不登校の児童など、小学1年生から中学3年生までを対象とし、倉敷市内の空き家を借りて週に3日、食事提供をはじめとする生活支援を行っています。

【アウトリーチ型夜の居場所活動（通称：MUSUBI）】

家や学校に居場所がない中高生を主な対象とし、月に1度、飲み物や軽食、生理用品などを無料で提供しています。MUSUBIでは、専門職（弁護士、司法書士、社会福祉士、教師、保育士など）と連携して、子どもたちの抱えている不安や悩みを受け止め、必要に応じて適切な支援につないでいます。

【朝食支援】

様々な事情で朝食を食べられない小・中学生に食事を提供し、必要に応じて適切な支援へつないでいます。虐待や生活困窮等、子どもやその家庭が抱える問題を教員などと連携し、子どもの貧困問題を解消することを目的とし、週1回程度、登校前の時間帯に活動をしています。現在は、大学生だけでなく主任児童委員や地域住民が調理ボランティアとして参加し、地域の中で顔の見える関係ができる場をつくっています。

【フード&ライフドライブ事業】

コロナ禍での所得減や、失業などで打撃を受けた子育て家庭に対して、食糧品や日用品を届ける「フード&ライフドライブ」を2020年春より開始しています。県内のこども食堂と連携し、企業や地域住民から寄付物資を集め、各家庭用に梱包しています。専用のLINEを運用し、相談対応業務も実施しています。年3回の実施で毎回300家庭以上に物資を渡しながら顔を合わせ、必要に応じて相談にのっています。

2 備前圏域の子どもの貧困及び支援団体の現状・課題について

(1) 備前圏域の子どもの貧困の現状・課題について

- ・貧困状態にある子ども達は一定数以上いると考えますが、非常に見えにくく、

月に1回程度のこども食堂では発見が難しいと感じています。

・赤磐市にある「子どもの家」では、1学年の3分の2が居場所を利用しており、家庭や学校以外の居場所を求めている児童が多いことが分かる一方で、地域からの苦情も多く、貧困状態にある子どもを受け入れると地域住民からの理解を得にくいことも事実としてあります。

・都市部に比べて周辺地域は人口が少ないため、もともとの地域で顔見知りの関係ができていることにより、かえって近所の目が気になって利用できないという声も聞きます。居住地域内での支援は緊急時には役立つものの、困っているからこそ人目を気にしてしまう支援対象者がいるため、支援対象者を学区内に指定するのではなく、複数学区からの受け入れをする団体が増えることや、「子どもの貧困」を前面に打ち出さないなど、地域の特色に応じた活動の変革が求められていると感じています。

・子ども食堂は地域の中での孤立を防ぐ側面もあるが、ひきこもりや不登校の子ども、発達障害などを抱えており集団での生活が困難な子どもや保護者、昼夜土日問わず働いている保護者は利用しづらい現状があるため、経済的貧困家庭ほど地域から孤立しています。

(2) 備前圏域の支援団体の現状・課題について

【団体数は地域によってばらつきがあり、都市部は支援団体が集中している】

・数年前まで、県内では子どものみ利用できる子ども食堂を運営している団体もありました。最近では、地域の交流拠点として本来求められていた姿である地域の子どものからお年寄りまでが集える子ども食堂(県内では「地域食堂」と呼んでいる団体が多い)が増えています。都市部には集える場が多く作られているが、山間部などの周辺地域では活動団体が少ない傾向にあります。

【「こども食堂(支援団体)を増やす」ことよりも「子育て家庭の応援者を増やす」ことで支援を充実させることができる】

・人口規模が少ない地域や少子化の地域では、子ども支援よりも高齢者支援などを充実させることに尽力されている地域が多いと感じています。地域の特性を考え、子ども食堂を増やすことよりも、困っている家庭の現状や、子育ては家庭の中で完結せずに地域の中で子どもを育てていく時代であることなどを地域住民に理解してもらうことが必要だと感じています。子育て家庭の応援者を増やすことで、「自分も子どものために何かしたい」という人が現れ、その地域の中で子ども支援が充実していくと考えます。

3 おかやま子ども支援ネットワーク事業の取組について

(1) 情報発信・情報共有を含めたネットワーク体制の構築

①ネットワークの構築

【ネットワークの目的】

- ・子ども支援団体の継続運営のサポート
- ・支援団体同士の交流や学びを深める
- ・子育て家庭への直接支援

【会員数】

| 構成 | 団体数 |
|------------------|-----|
| 子どもの居場所（こども食堂など） | 15 |
| プレーパーク | 0 |
| フードバンク団体 | 0 |
| 市町村社会福祉協議会 | 2 |
| 合計 | 17 |

②ネットワーク参加の働きかけ

- ・市町村社会福祉協議会（以下「市町村社協」という。）を訪問し、ネットワークの活動紹介を行いました。

市町村社協には主に研修会やフード&ライフドライブの紹介をし、支援団体への本ネットワークの紹介依頼や支援を必要としている子育て家庭へフード&ライフドライブのチラシを渡してもらうように依頼しました。

- ・子どもの居場所に訪問し、ネットワークへの参加依頼をしました。
子ども食堂に訪問し、ネットワークの活動紹介を行い、参加することのメリットについて説明しました。実際に活動の様子を見学し、利用している子ども達と触れ合ったほか、活動に使ってもらえるような寄付物品（企業などから寄付されたもの）を持参しました。
- ・定期的に研修会やオンライン交流会を実施し、顔の見える関係を構築したほか、研修会などで個別にネットワーク加入依頼をしました。

③ネットワーク会議

| 会議概要 | 参加者の声・得られた成果 |
|---|--|
| 2022年8月20日(水) 第1回支援者レベルアップに関する研修会 | <ul style="list-style-type: none"> ・事務局も出会ったことのない団体と直接顔を合わせることができた。 ・グループワークへの講師の参加により、より具体的に参加者の疑問などをぶつけ、自団体の活動のヒントとすることができた。 ・参加者からは、もっとグループワークの時間がほしいなど、他団体との積極的な交流を求めていることが分かった。 ・本研修会の参加者による次回研修交流会への参加希望もあり、交流を継続していけることが分かった。 |
| 2022年10月22日(土) 第2回支援者レベルアップに関する研修会 | <ul style="list-style-type: none"> ・前回に引き続いての参加者に加え、初めての参加者が19名おり、ネットワーク加入も進め、ネットワークが広がっている。 ・講師には事例を交えた講演を行っていただいた。 ・瀬戸内市で新たにこども食堂を始めた団体もあり、社協とつながることができた。 |
| 2023年3月2日(木) 第3回支援者レベルアップに関する研修会 | <ul style="list-style-type: none"> ・県内合同で開催し、県民局ごとにネットワークの活動を報告したことで、他市、他県民局エリアの動きを共有することができ、また地域を超えた交流を行うことができた。 ・大学生の参加が過去より多かった。 ・岡山では珍しい講師を呼ぶことができたため、いままでより、参加人数が多かった。 |
| 2022年11月24日(木) 第1回オンライン交流会(夜の部) | <ul style="list-style-type: none"> ・夜の時間帯に開催したため、昼間働いていたり、子ども食堂以外の業務がある団体の参加があった。 ・子ども食堂を始めたばかりの団体から、他の団体に対して質問が行われた。 |
| 2022年11月30日(木) 第2回オンライン交流会(昼の部) | <ul style="list-style-type: none"> ・昼の時間帯に開催したため、市町村社協の参加があった。 ・子ども食堂を開催している団体が1団体のみであったため、そこに対し、質問が集まっていた。 ・ボランティア募集について、事務局から募集掲示板の提案があり、それに賛同を得られた。 |
| 2023年1月6日(金) 第3回オンライン交流会 | <ul style="list-style-type: none"> ・昼・夜の参加者に加えて、岡山市内で数年にわたり活動している活動歴の長い子ども食堂が3団体参加した。 ・新たに赤磐市で子ども食堂を始めた団体が市町村社協の紹介で参加し、他の子ども食堂に対し、質問をするなど意見交換を行うことができた。 ・子どもの居場所か、子ども食堂のどちらで打ち出すかを迷っている団体に対して、子どもが主な利用者である食堂と、子どもも高齢者も参加している団体からの両方から意見を得ていた。 |
| 2022年10月18日(日) 2023年3月26日(日) ケースについての情報交換 | <ul style="list-style-type: none"> ・子ども食堂の運営者と若年妊婦、未婚の母の2ケースについて情報共有を行った。 ・対象世帯の居住地域外の当法人と居住地域内の支援者の両者が持つ情報を共有することができた。 |

④情報発信・情報共有（食材提供や寄附等）の状況

【共有した情報】

- ・研修会の開催
- ・オンライン交流会の開催
- ・子どもの居場所活動で使える物品の案内(手指消毒用スプレー、王将の弁当)

【工夫した点】

- ・Facebook やLINE などの SNS を活用して情報共有をしました。
- ・SNS が使えない会員(市町村社協等)には個別にメールで情報を発信しました。

【ネットワークメンバーの活動に活用された点】

- ・物品はこども食堂での配布に活用されました。（王将の弁当、野菜栽培キット、マスク、おもちゃ、駄菓子など）
- ・Facebook での周知により研修交流会に参加し、交流を深めることができました。

⑤協力企業・団体の発掘、連携

【連携企業】

- ・(株)岡山村田製作所(瀬戸内市)

企業内でフードドライブを実施し、フード&ライフドライブ事業に食品や日用品を継続して寄付いただいています。フード&ライフドライブで使えない期限の短い物は、岡山村田製作所から瀬戸内市社協に寄付し、廃棄物が出ないように工夫されています。

- ・(株)大町(瀬戸内市内の駄菓子屋)

フード&ライフドライブの配布会場に来た子ども達に対し、サンタの格好などをしてお菓子を配布していただきました。また、子どもの居場所団体(特に子ども食堂)に対して、「駄菓子と笑顔の交換」というプロジェクトで駄菓子の寄付をいただきました。

【工夫した点】

- ・企業に無理がない範囲での協力を求められるように企業担当者と打ち合わせを実施しました。
- ・市町村社協に訪問した際に、協力してくださる企業がないか確認をし、子ども支援がしたいという旨を話していた企業の紹介依頼をしました。

⑥ボランティア等の受け入れ

- ・高校生や大学生向けのボランティア募集サイトを作成し、掲載団体は随時更新しています。



↑ ボランティア募集ページのスクリーンショット

https://note.com/kswc_tsubasa/n/n7ce668d9181b

- ・ ボランティア登録証を作成し、新規ボランティアの発掘をしました。
- ・ 岡山市在住の高校生を岡山市の子ども食堂(岡輝みんな食堂、うのっこ食堂)に紹介しました。

⑦子どもの居場所で取り扱っているケース検討

- ・ フード&ライフドライブで支援をしている若年妊婦や未婚の妊婦についてのケース検討を実施しました。居住地域で活動している団体につなぐため、フード&ライフドライブの配布会場で支援団体を紹介し、マッチングしました。今後は、LINE上でも各家庭と連絡を取りながら、経過観察を行うとともに、マッチングした支援団体と情報共有を行います。

(2) 市町村域を超えたフードドライブを通じた見守り支援の実施及び実施体制の構築

①対象者の把握方法

- ・ フードドライブの公式LINEを活用し、LINE登録した子育て家庭に、フードドライブの開催日時、申し込みフォームを送信することでSNSを通じた周知、受付を行っています。
- ・ 公式LINE経由で生活の相談等が入ることもあり、今後必要な支援につなげることができています。
- ・ スクールソーシャルワーカーやケースワーカーを通じて、フードドライブを必要とする家庭の情報を得ています。
- ・ 訪問した市町村社協に対象家庭がいるかを確認し、チラシでの周知を依頼しました。

②物資の収集方法

- ・ フードドライブ開催の1か月ほど前を物資の収集日とし、倉敷市民会館や備中県民局、子ども食堂など開催場所にて、食糧品や日用品の寄付を集めました。
- ・ 収集日をFacebookなどのSNSや新聞、チラシを用いて事前に告知しました。
- ・ フードバンク岡山から物資の寄付をいただきました。
- ・ (株)村田製作所が企業内でフードドライブの物資の収集を行い、従業員から集まった食糧品や日用品、企業で購入した食品の寄付をいただきました。
- ・ 他団体の実施する助成金を活用し、不足した食糧品を購入しました。

③配布方法

- ・ 岡山市南区にある放課後児童クラブ「あいかぜクラブ」と「操山公民館」を使用し、会場での配布を実施しました。会場を2カ所に分け、家に近い会場や受け取ることが可能な日時を申込時に選択してもらうことで、会場の混雑を避けながら受け取りやすさを考慮しました。
- ・ 車がない、持病や出産など、会場に行くことが困難な場合に、スタッフによる配達を実施し、個別で対応しました。
- ・ 配布会場が限られているため、つばさ事務所での配布、普段利用している子ども食堂での配布、スクールソーシャルワーカーを通じての配布など柔軟

に対応しました。

④フードドライブ実施における相談対応件数

・年間申込件数：680件/相談対応件数：587件

| 開催時期 | 令和4年5月 | 7～8月 | 9月 | 12月～令和5年1月 |
|------|--------|------|------|------------|
| 申込件数 | 120件 | 9件 | 264件 | 287件 |
| 相談件数 | 0件 | 9件 | 311件 | 267件 |

【主な相談内容】

- ・金銭面の悩み（お金が足りない、児童扶養手当が止められた、など）
- ・働くことが出来ない（障害や疾病、出産直後、待機児童）
- ・養育費が支払われない
- ・離婚調停中のため児童手当などの支援を受けることが出来ない など

⑤関係機関につないだケース

- ・関係機関につないだケース数：12件
- ・フード&ライフドライブを利用しており、近隣のこども食堂を利用している世帯で希望があった世帯については、希望するこども食堂での受取が出来るよう調整を行いました。
- ・フード&ライフドライブで繋がっている子育て世帯から、「明日食べるものがない」とSOSが入り、居住地に近いこども食堂へつなぎました。加えて生活困窮者自立支援制度の窓口である市町村社協を紹介しました。その後、当該家庭はこども食堂からお弁当をもらったと連絡がありました。
- ・子どもの居場所団体が協力してマルシェを開催しており、そのマルシェに子育て家庭を招待し、近隣の団体を紹介しました。

⑥これまでの活動エリアを超えてのフードドライブの実施

【該当エリア名】

- ・吉備中央町

【実施した業務、工夫した点】

- ・市町村社協へフード&ライフドライブの案内をし、該当する家庭への周知を依頼しました。
- ・スクールソーシャルワーカーに、介入している家庭に対し、食糧支援が必要な家庭にフード&ライフドライブの活動を紹介してもらいました。

4 本事業を実施して感じたこと

(1) 課題

【フード&ライフドライブについて】

- ・申込人数が増え続けており、支援できる人数に限界を感じています。
- ・差別などが起こらないように具体的な対象の線引きはしていないが、制度上の支援（生活保護、児童扶養手当、就学援助など）を受けている世帯と、事情があって受けられていない世帯（離婚調停中など）に対し、同じ量の物資を渡していることは、公平ではないと感じています。
- ・本事業での支援は、基本的に保護者への相談支援や、保護者に対してその家庭の物資を渡す形をとっています。そのため、確実に子どもの食事などに還元でき

ているか不安に思うことがあります。

・フード&ライフドライブで配布した物品の転売に対して有益な対策がとれておらず、転売被害が相次げば企業からの支援もなくなることを懸念しています。

【ネットワークについて】

・子ども食堂の立ち上げのみを支援することが現場のニーズに合っているか疑問に感じています。立ち上げ支援だけでなく、継続的な運営を支援することも必要だと考えます。

・県内では「子ども食堂」と「地域食堂」といったように、子どもの居場所が区別されて考えられることが多く、区分に悩む団体もあります。

・コロナ前まで県内で主流であった子ども食堂は、地域の中で月に1回程度子どもやその保護者が集い、調理し、みんなで食事をする対面形式であったが、コロナ禍では、フードパントリーなどの物を配る形式をとる団体が増えています。食事とパントリーの両方を実施している団体もあるが、物資を配布するだけで大丈夫だと思っている支援者が増えると、本来目的であった交流を満足に行うことができず、関係が希薄になり、皆が集える子ども食堂の意義が薄れてしまうと感じています。

【行政との連携】

・フード&ライフドライブで生活保護受給者に購入した物資を渡すことは、担当するケースワーカーによっては収入認定される懸念があるため、避けざるを得ないこともあるが、ケースワーカーから支援物資を入手したいと申し出を受けることもあり、一貫した対応ができていません。

・岡山市は、フード&ライフドライブの情報を、ひとり親家庭へのメルマガである「岡山親子応援メール」で周知するなどの広報協力をしていただき、子育て家庭へ届けることができたが、他市町村での周知方法がチラシ媒体のみになり、なかなか受益世帯数を広げることができませんでした。

(2) 課題の解決方法

・他団体を参考にしながら、支援の終結の方法やルールを作っていくことが考えられます。

・子ども食堂や子どもの居場所は、開設回数が多いほど子どもが利用しやすく、加えて、専属スタッフがいると、困ったときにすぐ相談ができます。しかしながら、現在の岡山市の主流はボランティアベースで月に1度開催です。常駐かつ相談対応ができる子どもの居場所団体が各市町村に1つは必要であると考えており、そこに子どもが困った時にはすぐ連絡が取れる支援者が常駐することが理想であると考えます。

・パントリーの意義や、食糧品を提供することが支援のゴールではないということ伝えられる先進的な取り組みをしている支援者や、学術経験者に講演を依頼し、支援のあり方について再考する機会を設けることで支援者の質の向上を図ることが重要と考えます。

・生活保護世帯がフードバンク等から支援を受けることについての通達を県などから市町村に共有してもらうことで、担当者（ケースワーカー）による差を解消することに繋がると考えます。また、生活保護世帯はケースワーカーを通じての

申し込みで受け付けるなどの工夫をすることで、ケースワーカーが物資を届けることで家庭訪問の口実ができ、実際に届けることで、ポジティブな会話が増えることが期待されると考えます。

(※記載内容は、令和5年3月31日時点のものです)